



—北アフリカ地域ニュース—

リビア情勢：多国籍軍の空爆強化

リビア情勢は、依然、政治的・軍事的に膠着状態が継続している。他方、多国籍軍機はトリポリ空爆を一段と強化した。ベンガジの国民評議会は、欧米諸国要人のベンガジ訪問など着実に外交的、政治的成果を積み上げている。7日、カッザーフィー大佐は、約9分の音声声明を発表し、徹底抗戦を改めて主張した。同大佐の声明放送は約4週間ぶり。リビアでの食料品不足も、深刻化しつつある模様。トリポリ市民の不満も、かなり高まっていると報道されている。

空爆の強化

英軍と仏軍は、6月4日からリビア東部で攻撃ヘリを使用した地上攻撃を開始したが、ブレガやアジュタビーヤでの地上戦での動きはまだ出ていない。多国籍軍機のトリポリ空爆は、4月下旬から強化されてきたが、6月5日からさらに激しい空爆が開始された。6月7日には昼間の大規模な爆撃を行った。カッザーフィー大佐の自宅や軍・治安部隊の司令部を標的に激しい攻撃を実施している。

相次ぐ欧米諸国首脳の本ガジ訪問

欧州首脳の本ガジ訪問は急増している。EUのアシュトン外交・安全保障担当上級代表（5月22日）、伊国のブランティニ外相（5月23日）、米務省のフェルトマン次官補（5月23日）、英国のヘイグ外相（6月4日）。ロシアは中立の立場を維持しているが、6月7日、ロシア外相特使がベンガジを訪問した。中国は、6月3日にカタールで国民評議会と接触を行い、7日にはカイロの外交団がベンガジを訪問した。リビアのオベイディ外相は7日から中国を訪問している。

6月8日時点で国民評議会についてリビアを代表する組織と承認しているのは報道を整理すると7カ国。仏国、カタール、伊国、クウェイト、ヨルダン、セネガル、マルタ。

幹部の離反

トレイキ外相（4月3日、英国）、ガーネム石油相（逃亡は5月、6月1日にローマで記者会見）、リビア軍将官ら8人（5月30日）、マンフル労働相（6月7日報道）。5月には、カッザーフィー大佐夫人と娘がチュニジアに滞在中と報道されたが詳細不明。

（中東調査会 中島 勇）